

# 東陽中だより

教育目標 ～明日を拓く～  
・豊かな心 ・活きた知性 ・たくましい体  
発行責任者 尾崎 朋子  
文 責 佐々木 正道  
発行日 平成30年5月31日

## 「奇跡」ではなく「実績」～被災地から学んだこと～

校長 尾崎 朋子

例年より早く桜が開花した5月，3年生は修学旅行，2年生はスポーツ大会，1年生は遠足と，各学年それぞれに，集団で行動し仲間と協力することを学ぶ大切な行事がありました。どの学年も生徒一人一人が計画から運営まで自分達で考え行動し，充実したものとなりました。

さて，今年度，本校は修学旅行の研修の一つとして，岩手県で震災学習を実施しました。実際に宮古市の田老（たろう）地区を訪れてみて，私自身，気付かされたことがいくつもありました。

たとえば，高齢者や病院の入院患者を優先するという避難道は，実際に歩いてみると息がきれ，お年寄りにはきついのではないかと思うような急勾配でした。しかしそれは「戻るな」という意味であり，引き返そうと思わないために作られたのだということです。

また，現在は震災遺構となっている「たろう観光ホテル」は，1階と2階が鉄筋の骨組しかなく，3階は部屋がすべてなくなり，かろうじて床だけが残っている状態でした。今でも泊まることができそうな5階の部屋で，ホテルの社長さんが撮った津波の映像を見たのですが，堤防を越えて迫ってくる津波は，まるで巨大な生き物のように，信じられないスピードでカメラに向かってきます。3.11の津波の映像は何度も見ているはずなのに，見終わった後，私達はしばらく言葉が出ませんでした。



そして，建設途中のいくつもの新しい防潮堤の側をバスで廻ったのですが，「防潮堤は津波をくいとめるだけでなく，遺体を家族に返すためのもの」とガイドの方が言った言葉にどきりとなりました。未だ多くの方が行方不明であるという現実と遺族の方々の深い悲しみを思うと，心が痛みます。

田老地区の道の駅のすぐそばにネスレが出資して作られた野球場がありました。ガイドの方は「私は最初建設に反対でした。復興がまだまだなのに野球どころではないと思ったからです。でも違いました。今はここから子供達の元気な声が聞こえます。3月11日のあの日，避難道のすぐ横の道のない坂を，当時の中学生たちが縦に並んでバケツリレーのように幼稚園児を上へ上へと押し上げて命を救いました。その時の園児達が今中学生です。子供達の明るい声が響く街になりました。」と話してくれました。そしてこう続けました。

「同じ岩手県の釜石市では小中学生のほぼ全員が無事だったことから『釜石の奇跡』と言われています。でも，私は『奇跡』だとは思っていません。私達は毎年決まった日に町ぐるみで訓練を行っています。過去の教訓を活かすために日々先人の教えを伝えています。子どもから高齢者まで，自分の命は自分で守るためです。釜石もそうです。『奇跡』ではなく『実績』なのです。」

日々の積み重ねを怠らず，適切な考えと判断ができること，そして実際に行動できる力を身に付けることの大切さをあらためて感じています。そして，被災地の1日も早い復興を心から願ってやみません。